

新しい「しごと暮らし」、始めました。

理系男子が日本一の酒造りに挑戦!

郡山市在住 渡部裕樹さん



年齢○31才 職業○会社員(酒蔵) 世帯構成○本人
出身○兵庫県西宮市 趣味○ロードバイク、お菓子づくり

渡部さんは、平成28年の12月に郡山市に移住しました。東日本大震災当時、関西地方の大学院の学生で大手企業への就職は決まっていたのですが、自身も阪神淡路大震災で被災したこともあって、何か復興に役立てないかと考えつつも、その後は技術者として働く日々を送っていました。そんな中、SNSでふくしまの方と知り合ったことがきっかけでふくしまを訪問する機会が増加。夢を持って県内で活動するたくさんの人たちとの出会いを通じて、移住を意識したそうです。

そして、転機が訪れます。ある時知人に、「郡山市の酒蔵仁井田本家は、ふくしまの未来を考えた酒造りをしている」と教えられました。興味を持った渡部さんは、早速蔵の見学やイベントへ参加をしてみます。

01 郡山市



酒蔵の感謝祭で、東京で知り合ったお客様と



県内農家の田んぼで手伝い



大好評の「こうじチョコ」。前職の経験を活かして高品質を追求中!

すると知人の言葉のとおり、生産者として、未来を見据えた酒造りをしていることを確認。「ここで働きたい」と強く心惹かれ、仁井田本家への転職と郡山市への移住を決意し、現在に至っています。

「郡山市は、都市と田舎のバランスが良く、生活に便利でお米や野菜がとても美味しいです。」と、すっかり郡山市に馴染んだ様子の渡部さん。移住を検討するに当たっては、「郡山市では、沢山のイベントが開催されています。積極的に参加して、郡山市の素晴らしい魅力を体験したり、いろいろな方と交流してみたいと思います。」とのこと。今後について伺うと、「郡山市を観光地として発展させるお手伝いしたいです。分野を問わず、様々な生産者をつなぐことで、市内にたくさんの人を呼び込めるよう、今の仕事を通じて活動していきたいです。」と笑顔で話してくれました。

県外からの視点で地域の魅力を発信する

須賀川市在住 高木俊大さん



年齢○33才 職業○須賀川観光協会職員 世帯構成○本人
出身○埼玉県入間市 趣味○スポーツ観戦、水泳

須賀川市は、春は牡丹園、夏は釈迦堂川花火大会、秋には松明あかしという観光スポットがあるほか、特撮の神様「円谷英二監督の出身地であることからウルトラマンの故郷「M78星雲 光の国」と姉妹都市提携を結び、ウルトラマンをきっかけとした観光振興に取り組んでいます。その須賀川市で観光協会職員として活躍する高木俊大さんは、大学卒業後、北海道の旅行会社で働いていましたが、東日本大震災後、東北での被災地支援活動をしたと思い、復興庁の任期付き応援職員として、当時観光業務に携わる人材を募集していた須賀川市に赴任。任期は3年間でしたが、任期後も観光協会の職員として勤務しています。

「勤務先が決まったときは、『福島県の方は地元意識が強い』というイメージを持っていましたので、果たして自分の中に入ってきたらいいのか、という不安がありました。仕事やイベントへの参加を通じて多くの地元の方々と出会い、繋がりができたことで、不安もなくなりました。ただ、当時は方言や言葉遣いに悩まされたことが印象に残っています。インターネット上や独特の言葉遣い



Rojimaにて

イベントの準備中



03 須賀川市

に気を取られているうちに、肝心な部分を聞き逃すということが多々ありました(笑)。

また、高木さんは仕事以外にも、商店街で新たなヒットモノの交流が生まれることを願って始まったまちなかマルシェ「Rojima」(ロジマ)にも関わっています。「ここでも多くの方に会うことができ、たくさん刺激を受けています。出店者、来場者共に若い方が中心ですが、最近では年配の方も多く来場されています。須賀川市では、世代を問わず楽しんで活動されている方が多いので、楽しみながらすぐに溶け込むことができました。」

最後に、移住を考えている方へのメッセージ。「移住」と考えてしまうと、あまりにも大きな出来事だと身構えてしまうかもしれませんが、私は、住む場所と仕事内容が変わる、くらい自由な気持ちで考えました。観光という側面からその地域を訪れ、地域のことを知って「いいところだな」と思うことが移住するひとつのきっかけになるかもしれません。ぜひ、須賀川市に遊びにきてください!」

地域の希望に農産物6次産業化に取り組む。

田村市在住 稲福由梨さん



年齢○33才 職業○専業農家(農産物加工所「福福堂」代表)
世帯構成○本人・夫 出身○東京都江戸川区
趣味○温泉旅行、ロードバイク、透明水映画、ピアノ

02 田村市



黒米甘酒

稲福由梨さんは、知人の紹介でその後夫となる和之さん(沖縄生まれ・東京育ち)で平成16年に田村市に移住。が企画した田植えイベントに参加しました。イベント後、由梨さんは農作業を手伝うため市内滝根町地区に何度も通ううち、この地が気に入り、実際に発展していた和之さんと東日本大震災直後に結婚し、移住しました。

由梨さんは復興のためにこの地での起業を決意。復興に対する国の資金援助を自ら調べて申請するなどして、平成25年1月に加工場を自宅の敷地内に建設し、営業許可を取得して農産物の6次産業化に取り組みました。加工場は、稲福の「福」と福島県の「福」、食と農業を通して「福」(幸せ)を届けたいと思い、「福福堂」と名付けました。給食センターの閉所時期と重なり、タイミングよく備品を安く譲ってもらえたのもよかったです。「ただ決意しただけでは何も変えられない。考えや思いを言葉にし、行動することが大切。原発事故で地域の農家や主人が大変な思いや苦労をしている。福福堂が風評の払拭などの糸口となれば」との願いを胸に活動しています。

稲福さん夫妻が就農起業したことは、地域の大きな希望となっています。うるち米・黒米・小麦などの耕作面積は1ヘクタールを超え、「福福堂」を操業してからは、地域のエゴマやブルーベリーをはじめ、地域の農産物を使った商品づくりに奮闘しています。

黒米甘酒をはじめとした6次化商品は、市内の直売所でも取り扱っており、近所の農家からは受託加工の依頼も多く、地域の協力者の存在が大きいと二人は感じています。「豊かな自然、そこから生まれる空気、水、四季折々の風景、寒暖の差があり、水もよく、お米をはじめとした作物がとってもおいしい。人が温かく、それぞれが誇りを持っていると感じています。」と、稲福さんは笑顔で話していました。

「さるなし」で地域も元気に!

玉川村在住 荻野育恵さん



年齢○31才 職業○地域おこし協力隊(玉川村嘱託職員)
世帯構成○本人 出身○新潟県新発田市 趣味○食べること、旅行

04 玉川村



玉川村「さるなし」満喫ツアー参加の皆さんと村の特産品「さるなし」

母親の実家が郡山市にあり、幼少の頃からふくしまに来ることが多く、いつかふくしまに住んでみたいとの想いがあったという荻野さん。玉川村地域おこし協力隊の募集を知り応募したところ採用され、平成27年4月に着任しました。

ふくしまに縁があるとはいえ、村のことはわからないことばかりで戸惑うことも多く、地域を知るため、また、自分を知ってもらうため、積極的に村のイベントに参加し、今では多くの皆さんに覚えてもらったそうです。

協力隊としての活動の魅力は「自分のおもしろい、楽しい、好き、と感じたことを伝えて喜んでもらえること」だそうです。特に力を入れてPRを行っている特産品「さるなし」は、多くのメディアに取り上げられることが増え、「村やさるなしが有名になったのは、荻野さんのおかげだよ。」と言ってもらえ、本当にうれしかったそうです。「特産品の「さるなし」をぜひ食べてほしい! キウイフルーツの原種と言われ、とても甘酸っぱくておいしいです。旬は短く9、10月ですが、道の駅こぶしの里では多くの加工品も売っていて、特にさるなしソフトクリームはオススメです。」と笑顔で話してくれました。

そんな荻野さんに、移住を考える方へのメッセージをいただきました。「遊びに来ると移住では受入れられ方が全然違います。楽しい事ばかりではありませんが、ふくしまに住んでみたかった...と後悔するより一度飛び込んでみて、人生設計を練り直してみたいかがでしょうか!」



玉川村のマスコットキャラクター「山鳩のクックちゃん」のアテンドをしています。

こおりやま広域圏内に移住した皆さんに、地域の魅力や地域での生活などについて伺いました。